

有明高専

図書館報

No.17



目次

巻頭言	2
「私の薦める一冊の本」紹介文	3～6
教職員推薦図書	7
読書感想文紹介～古今東西の文学作品を題材に～	8～9
文友会活動報告	9
2011年度美術ギャラリー新着作品紹介	10
図書館統計	11
郷土の文化財・編集後記	12

巻頭言

心の再生 ～有明高専の学生を信じて～ 図書館長 焼山 廣志



昨年2011年は3月に発生した未曾有の東日本大震災そして福島原発事故による放射能汚染の大事件は当地のみならず日本全土を、また全世界を震撼させたことは記憶に新しい。その恐怖、悲しみは今もって軽減されるどころか、持続・拡大し続けている。この一大事は我々の今までの価値観・ライフスタイルを根底から覆すほどの衝撃を与えた。

それまでの日本には社会経済・政治の停滞から来る閉塞感が充満していた所に今まで予想すらしなかった現実を突き付けられ、被災者のみならず日本全土の人々がへたり込んでしまった。一時は前に歩き出す気力すら失われていた中で、それを救ったのは人々の「絆」であった。人々の善意が被災者を明日を信じて歩み始めさせる後押しになったのではないか。人を信じ、人の支えにより日々が生かされている事を、何の銜いもなく実感として受け入れられたこの体験は、唯一、日本「再生」への希望と思えた。

話は変わって、有明高専では2009(平成21)年より始めた【私の薦める一冊の本】という、400字の学生によるブックレビューのコンテストが今年で3年目を迎えることが出来た。年を重ねるごとに応募者が増え、今年は481篇もの作品が寄せられた。この作品を各学科より選出して頂いた先生方に一次審査をお願いした。そこから挙がってきた35篇の作品を図書館スタッフの教員2名職員2名の4名で10篇程度の優秀作品を選出するという手筈を進めた。このような教職員の支援により、この図書館報に10名の学生の作品を掲載することが出来た。

ところが、ここに至るまで、正確には二次審査の中で悲しい出来事があった。

上位にノミネートされていた学生の作品の一篇に記述上不審な点があることを審査スタッフの一人より指摘されたのである。それは学生の文章の大半がブックレビューの対象とした書籍のある部分を巧妙につなぎ合わせ、新たに構築し直したのではないかと疑いである。400字という制限字数のある短文の中でのブックレビューであれば、ある書からの大概を引用するといった容易な手法は通用しないと想定しての取り組みであったのだから、その衝撃は大きかった。今回はとりわけ、この作品の対象書籍がドキュメントであったことが災いしたのだが、結果的には「はしがき」からの一文をつなぎ合わせたという悲しい現実だった。

この事件以前に、有明高専図書館の特色の一つともいえる「美術ギャラリー」をめぐる深刻な問題が発生したことがある。

それは「有明高専美術ギャラリー」として図書館の耐震化に伴う全館のリフォームに合わせて一階に美術作品を展示するスペースを創設してからさほど時を経ない頃のことである。このギャラリーに展示している作品全ては、大牟田市および近郊に在住のプロの画家・書家・写真家による作品を無償で貸与しているもの、あるいは、寄贈頂いたものである。プロの作品を間近にそしていつも好きな時に好きなだけ鑑賞することのできる至福の空間に、そのギャラリーの壁や柱が何者かによって破壊されるという未曾有の事件が頻発したのである。展示している美術作品には危害が及んだ様子がなかったのはせめてもの救いであったが、そこにも危害が派生するのは時間の問題と思えるほど、事は緊迫していた。貸与している美術作品を展示するのは本校では、無謀なことかもしれないという空気が漂う中、この作品展示に全面的に協力して頂いている大牟田美術協会の加治屋会長をはじめとする諸会員の方々に、この本校の異常な実態を赤裸々にお話し、ご意見を伺いたいと、会員の代表の方々がお集まりの会議に出掛けた。そして本校の置かれている恥ずべき状況を正直にお伝えした。その時、会員の方々が口にした一言一言が今でも鮮明に残っている。

「有明高専の今の状況はわかった。問題はその美術ギャラリーを館長であるあなたがどうしたいと思っているのか。我々はその意向に従う」と。私はその時、このギャラリーの創設に深く関わっていただけに「何としてでもこのギャラリーを存続させたい。学生がこんな状況でも作品を貸与して頂けるならばそれが1点であっても展示し続けたい」と必死でお願いした。すると会員の方々が口をそろえて「わかった。協力したい。自分の作品が有明高専にお役に立っているのならば、自分の作品に危害が及ぶことがあったとしても悔いはない。」そして更に、「教育とはそういうものだ。損得や目先のことだけで事を急いではならない。学生の為、有明高専の為になると思ったら信念を貫く覚悟で今後も取り組んで頂きたい。我々も作品でお役に立ちたい。どうか、有明高専の学生を信じてあげてほしい」とまで言って頂いた。涙が出るくらい感動し、また深い感謝の念を抱いた。そして今、有明高専の美術ギャラリーは大牟田美術協会の皆様の温かい支援を受けて毎年、作品の入れ替えをしながら、多くのすばらしい作品に囲まれて存続出来ているのである。

話は戻るが、今回のブックレビューの選考時に発覚した悲しい事件には我々は怯みたくないと思う。こうした事件を契機に取り組みを止めることは容易である。しかし敢えて私たちは有明高専の学生を信じたいと思う。有明高専生の「心の再生」を信じなければならぬと思う。

「本を読む楽しさ」にいかにか気付けてくれるのか。その「本との邂逅」の喜びを体得してもらうための【仕掛け作り】をここでためらう必要はないと考える。

次年度こそは“自分の力”でこの企画に真摯に挑戦してもらえることを強く願う。

平成23年度

「私の薦める一冊の本」紹介文

入賞作品紹介

昨年度に引き続き、400字の「私の薦める一冊の本」と題して、有明高専生によるブックレビューを行っている。自由応募にもかかわらず、今年度も481編ものたくさんの作品が集まった。これらの作品の中から、優れた作品10編を選出したので、以下に全文を掲載する。

入賞者

電気工学科	1年	山崎 栞	『余命1ヶ月の花嫁』
建築学科	1年	椎原 奈央	『うさぎパン』
	2年1組	上原 広貴	『和解』
電子情報工学科	3年	伊藤実沙都	『怖い絵 2』
物質工学科	3年	菊田めぐみ	『ランナー』
物質工学科	3年	竹下 美海	『それでもボクはやってない』
物質工学科	3年	松本 光	『ギボンの月の下で』
機械工学科	4年	森本 幸宏	『「働きたくない」というあなたへ』
電子情報工学科	4年	伊藤 綾奈	『人生によく効く70の言葉』
建築学科	5年	牛島 由夏	『野火』



『余命1ヶ月の花嫁』

TBS「イブニングファイブ」著

電気工学科1年 山崎 栞

ある式場で結婚式が行われていた。それはどこにでもありそうな普通の結婚式に見えた。しかし、式場にいるだれもがこの結婚식을挙げられることに信じ

られないという思いを抱いていた。なぜなら、バージンロードを父親と共に歩いている女性はいつ何分か前まで酸素チューブをつけていた末期ガン患者だったからだ。女性の名前は長島千恵さん。この本は、千恵さんの闘病生活を記したものだ。約一年間の闘病生活の間、千恵さんは自身のブログなどにたくさんの言葉を残している。

「みなさんに明日が来ることは奇跡です。それを知っているだけで日常は幸せなことだらけであふれています。」

これは千恵さんが残した言葉の一つだ。二十四年という短い人生の中での約一年間の闘病生活で千恵さんは命や愛について何を感じたのか。彼女の残した数々の言葉は私たちに本当に大切なものを気づかせてくれる。あなたは彼女のメッセージをどう受け取るだろうか。



『うさぎパン』

瀧羽麻子 著

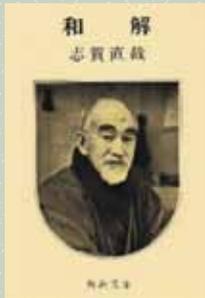
建築学科1年 椎原 奈央

物語は主人公・優子の視点で淡々と進められていく、と思いきや、死んだはずの母親が、優子の家庭教師である美和の身体を通して話しかけてくるというファン

タジーな展開をみせる。新しい学校、恋、そしてたまに家庭教師の身体を乗っ取る死んだ母親。なんとも天こ盛りに聞こえるが、さらさらと読めてしまう。そして読み終わった後、少しだけ、胸にあたたかいものが残る、そんな作品だ。

この作品の魅力は、一つ一つの何気ないシーンが、とても生き活きとしているところだ。作品中には様々なパンが出てくるが、それとてもおいしそうである。焼きたてのパンの香りと、もちもちふわふわとしていながらも、どこか素朴な食感がありありと想像できる。そしてそれを談議する主人公とボーイフレンドもかわいらしい。

良い意味で、手に汗握るだとか、大きな感動だとかのない作品である。空いた少しの時間にでも、気軽に手に取って見てほしい。



『和解』

志賀直哉 著

2年1組 上原 広貴

傍から見ればただの親子喧嘩だが、その先には温かい親子愛や家族愛を感じることが出来る作品。

『和解』と聞くと難しく感じてしまうが、難しい話ではない。順吉と父が自分の本当の気持ちを探っていく物語である。最初はお互いに意地の張り合いで、順吉は父との面会を拒否すれば、父は順吉が家へ出入りすることを禁止する。

もし、今自分の両親と上手くいってない人がいたら読んでほしい。それと喧嘩している人がいる人にも読んでほしい。解決への直接的なアドバイスはないかもしれないけれど、和解へのきっかけにはなるかもしれない。

気持ちに嘘をついたままだと何も前進しない。自分に正直にならなくては。それを伝えなくては相手は分かってくれない。たった百ページの小さな本だけれどとても大きなものを得ることが出来る。出会えて良かったと思える一冊。



『ランナー』

あさのあつこ 著

物質工学科3年 菊田めぐみ

主人公、碧李は一万メートル走のレースで惨敗後、陸上部を辞めてしまう。妹は自分が守る——強い意志からの退部だった。

他の女性を愛し、去っていった父親。碧李の妹、杏樹にはそんな父親の面影が残っていた。愛しているはずなのに、母親は杏樹に虐待を繰り返してしまう。母親を求める小さな手は幾度となく振り払われ、いつしかそれは杏樹の心に大きな傷跡を残す。一方、碧李は一万メートルでのあの惨敗から、走ることに恐怖を感じるようになっていた。

母親の、杏樹と向き合えない自分との葛藤。碧李の、走ることから逃げ、それでいて杏樹を守りきれない弱い自分への苛立ち。誰もが心に葛藤や苦しみを抱え生きている。真の愛情とは何か？ 苦しいから逃げる、それでいいのか？ 登場人物の心情を手取るような描写から様々な事を考えさせられる。この本によって現実の見方が今までよりもぐんと変わるであろう。



『怖い絵 2』

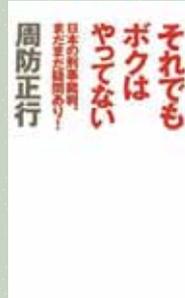
中野京子 著

電子情報工学科3年 伊藤実沙都

絵画を鑑賞するとき、あなたはどんな視点を用いているだろうか。

この本の作者は、一つひとつの絵画にまつわる時代背景や作り手が置かれていた当時の状況など様々な角度から絵画の「怖い」謎をひもといてゆく。一見すると画面構成の単純な肖像画などについても、作者の詳しい解説により、少しゾットする謎に触れることができる。

例えば、宴会中の丸々と太った農民たちが食事や酒を楽しむ姿が描かれた「豆の王様」という作品。これは、その土地の支配者へあてられ描かれたものらしく、実際のところこの土地のましてや農民が豪華な料理にありつけたわけがない。これは依頼主たる支配者の「農民が潤っているのは自分に権力がある」という見栄を作者が汲んでいたととれる。実際に行われていたであろう農民たちの質素な収穫祭を思い浮かべながら見ると、この絵からはまた一味違った価値を感じるはずだ。



『それでもボクはやってない』

周防正行 著

物質工学科3年 竹下 美海

「痴漢したでしょ」満員電車に乗り込んだ青年に突如訪れた悲劇。これは日本の裁判における現状と「冤罪」をテーマにした物語。

電車を降りた青年の袖を掴み冒頭の台詞を言う女子学生。青年の言い分に誰も耳を傾けず、駆け付けた警察官に「すぐ終わるから」と言われパトカーに乗せられる。痴漢の様な卑劣な行為をしていない青年を待っていたのは、衝撃的な事ばかりだった。怒号が乱れ飛ぶ取り調べ、示談をするように勧める弁護士。青年の供述も空しく、起訴が決まり、青年をさらに追い詰める裁判、そして下る判決……。

九九九%の有罪率、公判期間の途中で変わる裁判長、揚げ足を取るような尋問……この現状に投げ出された青年に対し、きっと貴方は真の理解者となり、やるせない気持ちで一杯になると思う。私達に関係のない話だろうか。数年後、通勤電車に乗り、また裁判員制度により人を裁く立場にもなりえるはずだ。だからこそ本書を手に取り考えてみて欲しい。



『ギボンの月の下で』

レイフ・エンガー 著 小島由記子 訳

物質工学科3年 松本 光

生まれ落ちた瞬間から死と隣り合わせだった少年ルーベ・ランド。彼の肺は十分に空気を取り入れることを拒んでいた。ルーベを死の淵から引き上げたもの、それは主と共にある父ジェレマイアの起こした奇蹟だった。

ルーベの視線を通して展開されるこの物語には、肺の病と闘い、様々な苦悩・葛藤を経験しながら成長してゆく彼の姿と、それを支える兄デーヴィ、妹スウィード、そして父ジェレマイアとの絆が描かれている。持病と折り合いをつけながら平穏な日々を送るルーベと家族に、突如襲う悲劇、そして兄の失踪。再会という信念を掲げ、ランド家は旅に出る。その旅の果てに、少年は再び奇蹟を目の当たりにするのだ。

心地良い温もりを持つ文章と美しい情景描写が印象的な本作は、家族愛、信念、そして奇蹟とは何かを考えさせてくれる。スウィード曰く「目撃者がいなければ奇蹟は存在しない」——あなたもその目撃者となりませんか。



『人生によく効く70の言葉』

斎藤茂太 著

電子情報工学科4年 伊藤 綾奈

「人生は、どんな色にも塗り替えることができます」——斎藤茂吉の長男としても知られる精神科医・「モタさん」こと斎藤茂

太さんが生前に遺した数々の言葉を、十二の章に分け、計七十紹介している。

モタさんが本書を通して勧めている習慣は、「メモをとること」「考え方を少し変えてみること」「笑うこと」など実にささいで誰にでも出来そうなことばかりだが、彼のユーモアあふれる考え方や柔らかい文体により、そんな「ささいなこと」さえも、どこか特別で希望に満ちあふれたことのように思え、自然とわくわくしてくるから不思議である。思わず自分も、「明日からやってみようかな」という気持ちになった。

「人生によく効く」、まさに良薬のような本書だが、決して苦くはなく、スッと心に溶け込んでくる。モタさんの言葉を人生の薬として、これからの毎日頑張っていこう、そう思える一冊だ。



『「働きたくない」というあなたへ』

山田ズーニー 著

機械工学科4年 森本 幸宏

『「働く」って何なんだ』。四年生に進級し自分の進路や就職について考えるようになってきた時、ふと思った質問で、長い間悩んでもわからず、ただ無気力になっていた。

そんなとき、たまたま見つけたのがこの本であった。フリーライターである著者の考え方や、その読者が著者へ送ったメールの内容を交互に織り交ぜた構成になっているため、多くの人の考え方が詰まっている。その中には働くことだけでなく、そこから枝のように広がった考え方でたくさん載っており、どれも興味深い内容ばかりで私にとっては宝箱のような一冊であった。

読んでいく中で自分に合う考え方を抽出し、練ることで私は私なりの確かな考え方を得ることができ、また前向きに努力していこうと決意する大きな原動力となった。だからあなたが私みたいにも悩んだら迷わず手に取って欲しい。悩んだ分だけあなたが得るものは大きくなっていく。そんな一冊である。



『野火』

大岡昇平 著

建築学科5年 牛島 由夏

極度の飢えに侵された時、誰しも人肉さえ口にしてしまうものであろうか。歴史上でもやはり、人肉嗜食というのは、恐ろしくとも認めざるを得ない事実なのである。

『野火』には、なかなか人肉嗜食に踏み切れない主人公を裏切って、人食人類が登場する。彼らは同胞を討ち、常食としていた。それは彼らにとって生きるための必然であったのかもしれない。

しかし、主人公の田村は違う。彼はフィリッピンで結核を患い、隊に見放された孤独な兵士であった。彼は食べなかった。彼は孤独の裡に彷徨い、行く先には死しかない無意味な自由の中で、人間の奥深いところまで入り込んでしまったのだろう。

この本を読み進めると、我々の精神状態について尋常とは何か、異常とは何か、誰もが錯綜してしまうに違いない。そのような疑問を戦慄が走るような異常な情景とともに、一度読み解いてみてはどうだろうか。

審査員講評

図書情報管理部室員 菱岡 憲司

自分以外の何かについて語るとき、二つアプローチが考えられる。一つは、できるだけ自分を消して対象に語らせるもの。もう一つは、対象について語る自分を前面に出すもの。今回の紹介文においては、後者のアプローチが有効に作用していたようだ。ニュートラルな書きぶりよりも、ときに偏りもする紹介者のフィルターを経た文章の方が、読んでいて興味が湧く。しかしこの方法、フィルターの精度が問われる。そして、どんなフィルターを選んだかという私（菱岡）のフィルターも問われている。緊張感があっていいものです。

機械工学科 南 明宏

3年連続で『私の薦める一冊の本』紹介文の審査員をさせて頂きました。年々応募数も増え、原稿用紙1枚の限られた文字世界において、読書意欲を十分に湧かせてもらえるような力作が多かったように見受けられます。これは日頃から皆さんが文学作品を数多く、じっくりと読み込んでいるから書けるのではないかと感じております。

時代劇小説ばかりを愛読している偏屈者も毎年この紹介文の審査を終える時期になると、SF小説、推理小説、メディアミックス作品等を読んで見ようと熱が入ります。今回こそ、隠公佐伝とならないように頑張りたいと思います。

電気工学科 池之上 正人

自分の好きな本を人に薦めることは簡単なことであるが、実際にその本を読んでもらうのはとても難しい。ただ単に「ここがステキだ」とアピールするだけでは興味は持ってもらえない。しかし、そこに「印象に残るフレーズ」や「その本に対する情熱」がプラスされると、何故か読んでみようと思ってしまう。きっと重要なことは、「如何に人の心を惹きつけ、人の心を動かせるか」なのでしょう。これは本の紹介に限らず、自己PRや技術者として必要な能力であるプレゼンテーション等にも通ずることだと思います。

皆さんが、今回の入賞作品のように、人の心を惹きつけ、動かす作品を数多く産み出し、技術者として大きく羽ばたいていくことを期待しています。

電子情報工学科 嘉藤 直子

私はこの企画の第1回目から審査員をしていますが、年々、全体的に作品の質が上がってきていると感じて

います。今年も力作揃いで、作品の選考にはかなり悩みました。

今回審査した作品の中に、ストーリーの結末まで書いたものがありました。本の種類にもよりますが、結末がわかれば、もうこの本は読まなくていいと思う人もいるでしょう。結末を紹介文に載せるかどうかはよく吟味してほしいと思います。

今年は例年に比べて、上級生からの応募が多かったことをうれしく思いました。同じ本を紹介していても、上級生と下級生ではその本の捉え方が微妙に異なるので、大変興味深く感じています。来年、さらに応募件数が増えることを期待しております。

物質工学科 川瀬 良一

皆さんの感性の高さに感心しました。私も刺激され、冬休み用に4冊の本を買い込みました。楽しみです。

建築学科 飛田 国人

私が担当した第一次審査では、応募者の意欲や『推薦文』への認識に差が感じられた。本の紹介は多くの作品ができていたが、読む気が無い人に読みたいと思わせる説得力を備え、推薦者の意思が伝わる作品は少なかった。一方、「この学生に会ってみたい」と、推薦者にまで関心が及ぶ作品があったことには驚いた。

また、「本を読んで自己へインプットし、他者へ推薦してアウトプットする」ことが、自身の心の揺れや考え方の変化に気づくキッカケとなった学生もいたようだ。読書後に見える風景が変わるような本と、皆に出会ってもらいたいと思う。

一般教育科 安部 規子

今回応募した皆さんの紹介文を読ませていただき、紹介された本の種類が、小説、伝記、エッセイ、社会問題を取り上げたものなど、バラエティーに富んでいることが印象に残りました。どのような紹介文が優れているのか審査することは私にとって難しいことでしたけれども、その本の内容を深く理解し自分のことばで伝えてくれているもの、そしてその本を私もぜひ手に取ってみたいと思わせてくれたものを選びました。

一般教育科 荒木 眞

提出された多彩な本の紹介文を読んで、学生諸子は、これから社会に出ようとする揺籃期にあって、自分の生き方に疑問を持ち、模索している時期にあることを改めて思い知らされました。もう、取り返しのつかない年齢になった私。これから、ますます成長、発展して行く皆さん。うらやましい限りです。自分の周りの目にみえる世界に留まらず、読書によって、広く人生模様を知り、自分の生き方を模索し、果敢に人生に挑戦してください。

今年は、4、5年の応募が多かったようですが、さすが、上級生、上手に書けていました。

教職員推薦図書

『夢をかなえるゾウ』

水野敬也 著
飛鳥新社

電気工学科

清水 暁生



この本は夢や目標を実現する方法が書かれた自己啓発書です。

皆さんは、夢や目標を持っていますか？この本には、夢や目標の見つけ方、その実現方法などが書かれています。一般的な自己啓発書と違い、読み易く、書かれている内容を実行したくなるように工夫されています。読書が嫌いな人や、初めて自己啓発書を読む人にもお勧めです。

この本の主人公は普通のサラリーマンです。普通の生活が嫌になり、成功したいと願う主人公の目の前にゾウの姿をした神様（ガネーシャ）が現れます。そして、ガネーシャは、主人公を成功させるために、様々な課題を与えます。その課題の内容は、「靴をみがく」、「募金する」、「食事を腹八分におさえる」など、簡単に実行できるものばかりです。主人公は、これらの課題を実行し、夢を実現させていきます。

皆さんも主人公と一緒に、ガネーシャの課題を実行してみてください。できるものからで大丈夫です。少しずつ成長することができます。

『はげまして、はげまされて』

～93歳正造じいちゃん56年間のまんが絵日記～

竹浪正造 著
廣済堂出版

物質工学科

近藤 満



副題にあるとおり、この本は93歳になる竹浪正造さんの56年にわたる絵日記であり、テレビ番組に取り上げられた縁で発刊に至っています。子どもの成長、巣立ち、奥様の入院、そして、別れなどを綴った大学ノートは

昨年4月以降に新しく着任された先生方にご自分の印象に残った本や、ぜひ学生に読んでもらいたい本を選んで、エピソードなども交えつつ推薦していただきました。ここで紹介する本は、図書館でも揃えていきますので、ぜひ手にとってみてください。

2,300冊にもなるということで、昭和～平成の時代における、ありふれた家族の日常が優しいタッチの絵と共に紹介されているのが印象的です。

私自身にも家族がおり、いつも感謝しているつもりではありますが、誕生日などの記念日ではない日、例えば「1か月前に家族に何があったか」などということを手細かに覚えていることはまずありません。まさに、継続は力なり。この絵日記を通じて、ありふれた日常が非常に大事であり、その連続が今を生きる人間の歴史であることを再認識させられました。

これからの社会を支えていく学生諸君にとっても、非常に読みやすく、今後自分に起こるであろうことを感じ取ってもらえればと思い、この本を推薦させていただきました。

『思考の整理学』

外山滋比古 著
筑摩書房

建築学科

鎌田 誠史



「こどものときから、忘れてはいけない、忘れてはいけない、と教えられ、忘れることは悪いときめてきた。これまでの教育では、人間の頭脳を、倉庫のようなものだと見てきた。」と筆者は述べている。我が国では、この倉庫が大きいほど優秀で、頭の優秀さは、記憶力の優秀さとしばしば同じ意味をもってきた。ところが、人間の頭脳にとっておそろべき敵があらわれた。ご存じ、コンピュータである。つまり、人間の頭はこれから、一部は「倉庫」の役をはたし続けなくてはならないだろうが、それだけではいけない。新しいことを考え出す「工場」でなくてはならない。この本には頭脳を「工場化」するためのヒントが随所にちりばめられている。今の時代、つまり情報過多社会に必要なのは情報を手に入れることよりもいかに「捨てる」かが重要だと気づかされる。初版から25年を経ても読み続けられているこの本は、特に卒業研究に取り組む学生に読んでほしい一冊である。

読書感想文紹介

～古今東西の文学作品を題材に～

2年生の夏期休暇・冬季休暇の折に、読書感想文を課している。インターネットからの盗作を警戒し、そのような取り組みは減っていると聞くと、盗作する者は大抵、時間に追われて木に竹を接いだような拙劣な文章を提出するため、すぐバレる（もちろん厳罰に処す）。また普段から当人たちの語彙・文体を知っているため、見分けるのは意外にやさしい。しかしなかには、巧妙にとりつくろった「上手」の手による盗作もある。じつに愚かしい。そもそも、こちらは参考にするのは咎めていないし、他者のすぐれた感想を知ること、よい感想文を書く第一歩である。文章を盗むということは、その対象に盗むべき価値があると認めてのことだろう。そう見抜く目があり、自分のもののようにつなぐ腕があるのなら、引用等のかたちで参考にしたことを断り、自分はそれに大いに共感した旨を述べればよい。もちろんオリジナリティの面では劣るが、それも立派な感想である。他人の意見と自分の意見を峻別し、共通点・相違点を見出す——これはコミュニケーションの基本であり、学問の基本でもある。

さあ学生諸君、以下に掲載する二つの感想文を読み、大いに「盗み」たまえ。（菱岡憲司）



『カルメン』

メリメ 著 堀口大樹 訳（新潮文庫）

2年4組(建築学科) 西村 ムツミ

「カルメン」の話は昔からなんとなく知っていた。でも、本を読んだことはなかった。だから、この機会に読もうと決めた。本

を読み終わったとき、ある人物の見方が変わった。その人物とは、カルメンだ。わがままな美人で男をたぶらかしている女——これが本を読む前の私の中のカルメンの姿だった。

本を読んでいるうちにある言葉が気になった。それは、「カルメンはいつだって自由な女よ」とカルメン自身が言った言葉だ。カルメンは多くの男性に愛された。が、彼女を一番愛しているのはカルメン自身であるこの言葉から分かった。

本を読めば、カルメンはわがままに生きていくとわかる。それは自身を甘やかし、好き放題やりたい放題にしているから。すべて自分可愛さからの行動なのだ。

カルメンは、物語の中でホセ、あるいは別の男性に一時は惚れていたと言った。カルメンが果たして本当にその一時の間、惚れていたかは、分からない。でも、一時しか惚れないのは、やはりカルメンが自分自身を誰よりも愛しているからと言える。誰かを愛するという事は自由でないことだ。自分以外の人といると、どうしても自分のやりたいことができなくなる。ましてや誰かを愛すると、相手を思い、自分のことは二の次となる。カルメンは自由に生き

る女だ。そんな彼女は誰かに愛され愛するよりも、自分を愛し、自由を求めて生きている。

しかし、どうしてカルメンは殺される程に愛してくれたホセですら愛さなかったのか。原因は育ってきた環境にあるのではないか。カルメンはとびぬけた美人だ。何もなくても男が彼女に言い寄ってくる。きっとカルメンは昔から多くの男性に好意を寄せられていたのだろう。そんな日々を生きてきたカルメンにとって、愛されることは当たり前であつたに違いない。カルメンの目に、ホセの姿は自分に言い寄る多くの男の中の一人としてしか見えていなかった。そんなホセにカルメンは自分は悪魔だと言った。悪魔とは、どんなに愛されても愛さないことから言った言葉だろう。カルメンにとって一番は自分自身、それを自覚しているからカルメンを愛してしまったホセにとっては悪魔なのだ。

物語の最後にカルメンはホセに殺される。そのときカルメンは自分から死を選んでるように思えた。カルメンはホセから逃げることもできたはずだ。ホセもカルメンを殺さなくてすむようにカルメンに自分と一緒に来てくれと言った。それに対してカルメンは、「殺される所へならついてゆきますよ」と言った。カルメンはホセを愛するぐらいなら死を選ぶほうがよいと考えていると分かった。そこまでカルメンは自由でありたかったのか。ロミオとジュリエットが互いを思って自分から死を選んだように、カルメンもただ一途に自由でありたかったのだ。自分自身を愛し、好きなことを好きなだけする。それが「自由」というカルメンが求めたものだろう。誰よりも自分を愛することで自由であった女——それがカルメンだった。

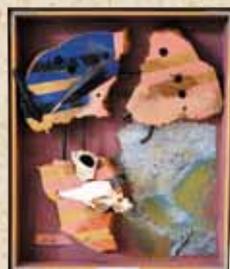
2011年度 美術ギャラリー新着作品介绍



(写真)作品名:水蓮
作者:高口 博文



(洋画)作品名:ラ・ラ花が咲く
作者:木村 和子



(洋画)作品名:ウエクアップN・Y・C
作者:黒田 寛之



(日本画)作品名:黄彩
作者:奥苑 和司



(写真)作品名:華麗なアビール
作者:中村 信也



(洋画)作品名:ココ
作者:田中 陽子



(染色)作品名:遊華
作者:古賀 悦子



(日本画)作品名:樹木
作者:田中 千鶴



(写真)作品名:泥ん子大将
作者:渡辺 和彦



(日本画)作品名:祈願
作者:木下 潤



(書)作品名:瓦當小袋山観音岳
作者:中本 管城



(日本画)作品名:秋日
作者:角 久仁子



(洋画)作品名:バレリーナ
作者:石井 保



(書)作品名:独坐観心
作者:山口 八石



(書)作品名:龍
作者:境 龍井



(日本画)作品名:小湖の秋
作者:今村 愛子



(洋画)作品名:硫黄山
作者:大山 好美

(洋画)作品名:雪原の朝
作者:木戸 直道



(洋画)作品名:朝陽阿蘇
作者:加治屋 陞

図書館統計

■平成22年度利用状況

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	24	23	26	26	22	20	25	24	22	21	22	22	277
入館者数 総数	4074	4917	6283	7084	4144	3249	5055	6448	4664	4166	5809	1424	57317
(内夜間)	789	1103	1186	1656	395	187	983	1411	871	935	986	0	10502
(内土曜日)	101	255	476	422	106	0	358	381	97	113	335	0	2644
1日平均	169.8	213.8	241.7	272.5	188.4	162.5	202.2	268.7	212.0	198.4	264.0	64.7	206.9
貸出冊数 総数	494	538	644	494	306	216	443	274	452	383	265	79	4588
(内夜間)	137	132	181	143	77	16	142	99	116	127	59	0	1229
(内土曜日)	15	45	36	28	26	0	24	6	9	13	18	0	220
1日平均	20.6	23.4	24.8	19.0	13.9	10.8	17.7	11.4	20.5	18.2	12.0	3.6	16.6

■分類別図書貸出冊数の推移

年 度	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	*その他	合計
平成18年度	114	63	173	140	679	2179	14	151	26	1206	2831	7576
平成19年度	74	63	53	32	568	1791	5	61	8	689	793	4137
平成20年度	88	62	90	67	523	1756	13	108	48	971	899	4625
平成21年度	83	59	46	52	587	1684	12	136	40	1071	914	4684
平成22年度	104	64	23	32	754	1632	2	48	53	968	908	4588
平 均	93	62	77	65	622	1808	9	101	35	981	1269	5122

*「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す。

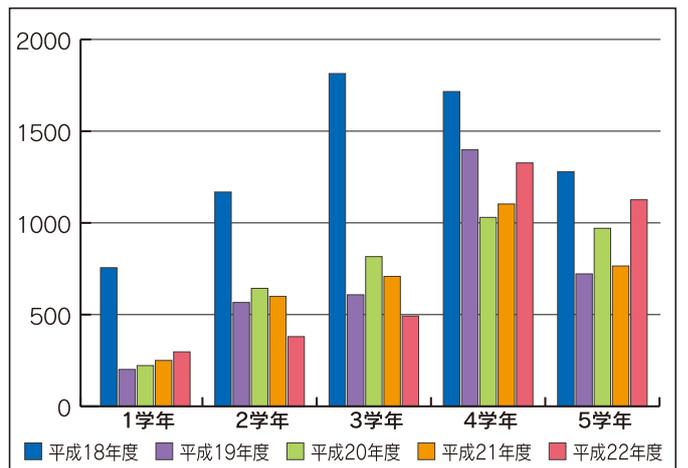
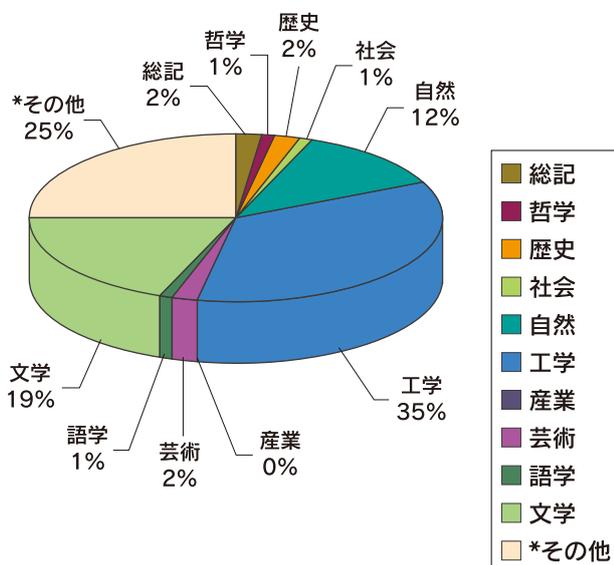
■利用状況の推移

年 度	開館日数	利用登録状況				入館者数		貸出冊数			1日当たりの数値		1人当たりの数値		
		総数	(内学生)	(内教職員)	(内学外利用者)	総数	(内夜間土曜日)	総数	(内学生のみの貸出冊数)	(内夜間土曜日)	(内学外利用者)	1日当たり入館者数	1日当たり貸出冊数	学生1人当たり貸出冊数	利用者1人当たり貸出冊数
平成18年度	271	1273	1073	175	25	73033	14340	7576	6893	1945	222	269.5	28.0	6.4	6.0
平成19年度	235	1311	1099	176	36	40427	4990	4137	3788	759	126	172.0	17.6	3.4	3.2
平成20年度	274	1306	1097	165	44	57205	11636	4625	4061	1251	232	208.8	16.9	3.7	3.5
平成21年度	274	1352	1085	209	58	58441	11602	4684	3978	1242	222	213.3	17.1	3.7	3.5
平成22年度	277	1321	1083	174	64	57317	13146	4588	4102	1449	179	206.9	16.6	3.8	3.5

■学年別図書貸出冊数

	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	合計
平成18年度	550	1197	1773	1675	1299	6494
平成19年度	201	525	567	1419	722	3434
平成20年度	222	602	775	1030	950	3579
平成21年度	250	558	667	1103	765	3343
平成22年度	297	380	492	1327	1126	3622

■分類別図書貸出冊数(平成18~22年度平均)



郷土の文化財

登録有形文化財
旧三井ポンプ所及び変電所
昭和8年(1933) 久留米市三潯町高三潯



北棟と南棟

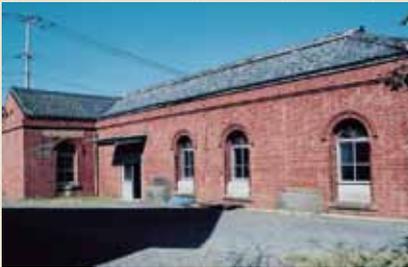
田園風景の中に在る煉瓦造の当建物は、筑後川の水を三潯地域の広い範囲に供給するために造られたポンプ所と変電所である。もともこの地域は、地形的に農業用水の確保が難しく、水量豊かな筑後川の水の確保に苦慮していた。ようやく、大正3年(1914)に前身建物が造られ、それに代わって当建物が昭和8年(1933)に規模を大きくして再建された。

T字形に配された棟高が異なる3棟の建物は、高地三潯用の200馬力と120馬力のポンプ2機が設置された建物(東棟)、低地三潯用の10馬力のポンプが設置された建物(北棟)、変電所(南棟)に分かれる。

煉瓦の壁はイギリス積で、その厚さは東棟と南棟が2枚積み(約46cm)、北棟は1枚半積み(約35cm)である。東棟と南棟の窓はアーチ形、北棟の窓は矩形であり、アーチ形窓の下部、矩形の窓の上下、扉の上部にはコンクリートを使う。小屋組は3棟ともキングポストラスで、陸梁・合掌・放杖・母屋桁等、規模が異なる3棟であるが、部材の大きさは同じである。

工事関係の書類から、基礎工事、煉瓦・瓦工事、木工事に分けて地元の職人が請け負い、セメント・煉瓦・瓦の現物が支給されて工事が実施されたことが分かる。

当建物は地域の農業に貢献し、地元の人々の手によって、地元の材料を用いて建設されたものであり、三潯地域の歴史を現在に伝える貴重な建造物である。(建築学科 松岡高弘)



東棟



東棟内部



小屋組

編集後記

図書館カウンターから

『国語が嫌いだったから高専に入学したのに、夏休みに強制的に世界文学を山のように読まされた。いやでたまらなかった。しかし社会に出て、この時期それらを読んだことは、自分の人生の中で大きく役にたった。』
—有明高専創立初期頃の、ある卒業生の言葉です。

英語が話せる高専生はもとより、理系ができてあたりまえの高専生。【文学もできる有明高専生】になるのはいかがですか。今、お手軽な文庫サイズの文学作品を日本・世界と幅広く取りそろえています。難易度を示した読書案内や、本校学生作のユニークなキャッチコピーも館内に掲示しています。これらを読むめやすにして数多くの作品にふれてみてください。入口すぐの回転書架がみなさんを待っています。

とても不思議なことですが、来館者は、明確な目的を持った人と目的のない人との全く相反する2つのタイプに分けられます。調べものの解を迅速にすばやく得るために来る人と、知らないものに出会うために来る人。図書館には本棚さえあればいいと思われていたのに、いつのまにか電気機器やパソコンが多くを占めてきました。図書も電子化に取り込まれ始めています。そのうち、『紙』の感触を味わうために図書館に行く、という新しい時代が来るかもしれません。そうなればなおいっそう図書館には本そのものの現物をそろえておく必要があると思います。

現代の生活の中で、こんなにもひっそりと静かで、安全で、一人でいてもおかしくなく、こわくなく、脳を未知の世界へいざなってくれるすてきな大きな空間は、探してもそうたくさんはないでしょう。守られているこの貴重な空間がこわされないように、いとおしみながら維持していきたいと思っています。(N)